

目的 齲蝕の誘因には食物と食生活の占める割合が大きいとされている。とくに幼い子どもの場合、これらを管理しているのは母親である。そこで、ここでは食生活を中心とした養育態度と齲蝕との関係を明らかにし、家庭で実施可能な齲蝕予防対策の一助とする。

方法 倉敷市内の9幼稚園の3歳児、男女計444名の保護者に、アンケート用紙を配布し回答を依頼した。調査内容は食生活に関する項目のほか、ブラッシングの状況や睡眠時間および2,3の家庭状況などである。結果の処理は調査項目ごとの分類にしたがい、齲蝕数との関係についてt検定を行った。さらに、記入された齲蝕予防に望ましい条件数と、望ましくない条件数を個人ごとに教え、それらの条件数の多寡と平均齲蝕数との関係を検討した。

結果 調査対象児の平均齲蝕数は 3.4 ± 4.3 本であり、わが国の3歳児の平均齲蝕数4.3本(昭和56年、歯科疾患実態調査報告、厚生省)に比べかなり少なかった。調査項目のうちブラッシングは1日2回以上が1回以下より、3度の食事はよく食べる方があまり食べない方より、間食回数は1日1回以下が2回以上より、間食を食べる時は決まった場所で食べる方が遊びながら食べる方より、夕食後に間食をとらない方がとる方より、それぞれ危険率5%以下で有意に齲蝕数が少なかった。夕食後に間食をとる子どもの比率は、子どもの就床時刻が遅くなるにつれて増加した。また、齲蝕予防に望ましいと思われる条件を多く備えている子どもほど齲蝕数は少なく、逆に、齲蝕を誘発し易いと考えられる条件を多く持っている子どもほど齲蝕数が多い傾向が認められた。